



ひらほく新聞

ひらほく新聞で検索!
★ホームページ ひらほくランド★
http://www.hirahoku.com/
☆バックナンバー含め ひらほく新聞を
閲覧・ダウンロード可能です!

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

「あなたの夢はなんですか?」その時少女はこう答えた... 「私の夢は大人になるまで生きることです」

フィリピンのスモークーマウンテン(積み重ねられたゴミが自然発火し、いつも煙が上がっている)だから「煙の山」で出会った少女は「あなたの夢はなんですか?」と聞いた私にニコニコと明るい笑顔を浮かべながら答えました。「私の夢は大人になるまで生きることです」。先月、池間哲郎さんという方のも感動的な講演に参加、深く心に響く衝撃的な内容でしたので、「生きる意味」を感じとっていただきたく講演及び、書籍の内容からご紹介します。

真剣に生きたことなど一度もない、努力を重ねて物事を達成したこともない。三十代後半まで中途半端な人生を歩んできたという池間さんにとって、ゴミ捨て場の子どもたちとの出会いは、それまでの生き方をすべて破壊するくらいの衝撃でした。そして「真剣に生きなければ」と心の底から思い、「自分を変える」ことを決意、アジアの貧しい子どもたちと一生つき合っていくことを自分に誓いました。

世界の人口の約80%、50億の人々は、アジアやアフリカなどの貧しい国々、開発途上国に暮らしています。そのうち6億人の人々は、今日一日の食べ物すら手に入ることができません。食べ物を買うことができない、きれいな水を飲むことができない、小さな薬さえも買うことができない、そんな貧しさが原因で、慢性的な栄養不良で抵抗力がまったくないため、2秒に一人が死んでいきます。一日に4万人以上の人が死んでいくという現実をぜひ知ってもらいたいと思います。この現状をよそ

とだと考えないでください。なぜなら、この問題は、私たち豊かな国とも非常に関係のあることだからです。貧しいアジアの国々では「お手伝い」という言葉はないそうです。3歳になればゴミ捨て場の作業などの「仕事」(一日中働いて50円ほど)ができるので、家庭を助けるために皆自分から働くのだそうです。学校へ行きたい、先生になりたいという夢を持つ子も多いそうです。



初めて見る弁当のごちそうを前に、誰もが手を付けずに全員が家族のために持ち帰る子どもたち。モンゴルで真冬の極寒マイナス30℃のなかでマンホールで生き抜くホームレスの子どもたち「マンホール・チルドレン」。親が生きていくために売られていく少女たち。

(多くはエイズに感染して死んでいくそうです)鉛筆もノートも、教科書さえもないのに、屋外にブルーシートを敷いて必死で学ぼうとする子どもたち。10歳の時、地雷を踏んで右足を失い、「足を失ったからこそ、私は真剣に生きる事ができるようになった。だからこそ今の幸せがあるんです」と語る義足の夫婦...

世界人口が約68億人。その中で私たちが豊かに暮らしている人は世界人口のうち20%に過ぎません。貧しさで死んでいく人々がこんなにもいるのかと世界の食糧問題が語られますが、実は全体で食べていけないだけの食料は100%あり、豊かな国に住んでいる2割の人間が世界の食糧の7割近くを食べているのです。つまり、食糧があるかないかの問題ではなく、「分け方」の問題なのです。日本人の食卓に出てくる食糧の、なんと2割か3割は残飯として捨てられています。これをカローリで計算すると、7千万から8千万もの人々が生きることができるといわれています。もともと日本人は、食べ物を大切にしてきた国民です。今一度、まず大人たちがその大切さを子どもたちに伝えていかなければなりません。池間先生の、映像を交えたこうしたお話をお聞きください。飢えて死ぬという、自分

たらの知らない世界があることを知り、そして考え込みます。その気づきこそが大切なのです。池間先生が20年間この活動を続けてきた理由がそこにあります。アジア途上国の貧しい劣悪な環境の中で、ひたむきに一生懸命に生きる子どもたちに学ぶという姿勢です。

①心から尊敬すること
「あげる、してあげる」といった現場での上から視線を一切取り除き、現地で人々を心から尊敬する

②知ることも大切なボランティア

毎日のように貧しさを多くの命が奪われていく現実、そこで一生懸命に生き抜いている人たちがいると知ること

③少しだけ分けること

自分の優しい心を少しだけ分けること、ほんのちよつと1%だけでもいい、少しだけ何かを我慢して分ける心が大切

④最も大切なボランティアは、自分自身が一生懸命に生きること

あれだけの深刻な環境のなかでも笑顔を見せることなく必死で生き抜こうとする子どもたちの姿から学ぶこと、一生懸命に生きるからこそ自分の命も他人の命も尊いと思えるし、真剣に生きてこそ、人の痛みや悲しみは胸に深く伝わってくる。何より目の前のこと、自分にできることに真正面から向き合うこと。最も大切なボランティアは、自分自身が一生懸命に生きることです。

【池間哲郎さん略歴】1954年沖縄県生まれ。出張で訪れた台湾で山岳民族の貧困と人身売買問題を知ったことをきっかけに、1990年よりアジア各国のスラム街やゴミ捨て場などの貧困地域の撮影・調査・支援を開始。映像制作会社の経営の傍ら個人で支援活動を続け、1995年より自らが撮影した映像・写真を用いた講演・写真展を開始。アジア途上国の貧困地域に生きる人々の姿を通して、一生懸命に生きる大切さ・感謝の心・命の尊さを今一度見つめ直そうと伝えていて、その講演と写真展は3,500回を超える。1999年に立ち上げたNGO沖縄(現NPO法人アジアチャイルドサポート)は、2002年にNPO法人の認可を受け、支援の輪をさらに大きく広げている。

- ・NPO法人アジアチャイルドサポート代表理事
- ・JAN(日本アジアネットワーク)代表者/カメラマン



【池間さんとサムクムサンという女性】

彼女は11歳で地雷を踏み右足を失う。17歳の時、オートバイに跳ねられ生死の狭間を数ヶ月彷徨う。それでも極貧との戦いに負けずに義足の不自由な足を引きずり懸命に働きながら大学に通った。「障害者は乞食では生きていけない、自分で生きていく力の大切さを訴えたい」とこの度 障害者職業センターを開設する。

☆上記以外の池間さんのお話及び、著書の書籍情報などを少しですがまとめたものがありますので、ご希望の方はご連絡いただければお届けいたします。

「世界一美しい顔」

私の母の顔は、右の頬一面が大きくただれています。それはヤケドのアトです。どうしてヤケドをしたのか聞いた事もありましたが、母はいつも笑いながら、子供の頃ヤカンをひっくり返してこうなったのだと説明してくれていました。私は母のヤケドのアトが大嫌いで、なるべくお友達に見られないように、いつも心を砕いていたのです。

父兄などの集まりの時にも『学校に来ないでよ』と言い続けて来ました。一緒に出掛けた時でも、向こうから友達が来ると私はすーっと母から離れて、まるで他人のような素振りをとって来ました。

私の誕生日はいつも父と母と私でした。『たまにはお友達を呼んだら?』と母が言ったこともありましたが「そんなこと。恥ずかしくて呼べないわ」と私が怒ったので、翌年からは、母は何も言いませんでした。

先月のことです。家庭科の宿題を置き忘れて来てしまいました。夕べ遅くまでかかって縫ったのに、朝寝坊してあわてて家を出てきたからです。一時間目の途中で気がつき、取りに帰ろうか迷っていました。先生のお話もよく耳に入らぬまま一時間目が終わり休み時間になりました。「M子さん、お母さんが廊下に来ているよ」と言われた時、「宿題を届けてくれたんだわ」とほっとした気持ちと同時に「お母さんの顔がみんなに見られてしまう」という気持ちとがごちゃごちゃになって「学校へ来ちゃ駄目って、あんなに言うておいたでしょう」と怒鳴りました。

母はニコニコしながら「わかっているけれど、せつかく夜遅くまで頑張ったんだもの、困っていると思って」と言いました。私は、風呂敷包みを乱暴に奪い取って「そんなおばけみたいな顔で、いつまで

もないでよ」とまた怒鳴り後ろも振り向かずに教室にかけこんでしまいました。気の重い、それはとても長い一日でした。

その夜、父が「M子、お前に話しておきたいことがある」と言われ静かに話し始めました。「お前が一歳の時の冬、近所で火事があり驚いて飛び起きた時は、火に包まれて逃げ場がない。とっさにお前を毛布ですっぽり包み、しっかり抱きしめたまま炎の中をくぐって、やっとのことで表に逃げ出すことが出来たんだよ。お母さんの顔をよく見てごらん。そのヤケドはその時のヤケドなんだよ。」

私は初めて聞くその話に息も出来ませんでした。「今まで本当のことを言わなかったというね。お母さんが『私のヤケドがM子を助ける為にできたんだなんて、もし思うと心に負担が残るんじゃないかしら』ってずっと言い通してき

たから、つい、今日まで本当の話をしなかったんだよ。M子の顔が、こんなにきれいであるのも、お母さんが濡れた毛布でお前を包み、しっかりと抱きしめたまま必死で逃げてくれたからなんだよ。お父さんは、お母さんの顔のヤケドを見ると、心の中で『ありがとう。ありがとう。本当にありがとう』ってお礼を言っているんだよ。」

私はあとから、あとから流れてくる涙をどうすることも出来ませんでした。「お母さん有難う。今までのことごめんなさい」もう胸が詰まって言葉にはなりませんでした。

母の顔にあるヤケド。今では私の誇りです。私への愛のしるしなのです。だから、よそのどんなきれいな顔のお母さんよりも、私は私の母の顔を美しいと思っているのです。

(藤井 均「世界通信教育情報」より)

「自慢の娘」

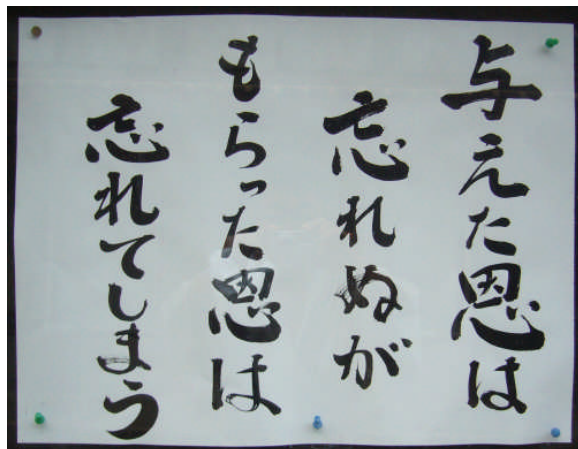
ある女性のお父さんが病気で長期間、入院していました。彼女はお見舞いに行きたくていつも思っていたのですが、仕事が大切なプロジェクトを任されて忙しかったのと、遠く離れた実家の近くの病院だったので、なかなか行くことができませんでした。

ある晩、会社から家に帰ると、お父さんが入院している病院から「容態が悪化したので、すぐに来てください」というメッセージが留守番電話に残されていました。病院に急いで向かいながら彼女は「こんなにすぐに容態が悪化するなんて思わなかった。何で休みを取って会いに行かなかったのだろう」と後悔していました。残念ながら、お父さんは彼女が病院に着く前に、亡くなってしまいました。病院の待合室で彼女が「お父さんに最後会ってからもうずいぶんになる。私のことを忘れてしまっていたかもしれない・・・。もう一度お父さんに会いたかった」と、落ち込んでいると年配の看護婦さんに、「あなたが〇〇さんの自慢の娘さんね」と話しかけられました。だまって、頷く彼女に看護婦さんは「お父さんはいつも『私にはかわいい娘がいてね。1人遠くでがんばって仕事しているんだよ。これは高校の時に、全国大会に出場した娘の写りが載った新聞なんだ』と言って新聞の切り抜きを見せてくれたのよ・・・」と話しました。

彼女はお見舞いには行けませんでした。お父さんの心の支えになっていたと思います。そして、お父さんが自慢してくれたことが、これからの彼女の心の支えになると思います。死は人と人を別れさせますが、愛してくれた気持ちは永遠に残ります。

[大切な人に贈りたい24の物語 (中山和義)]より

「恩」という字には“いたみあわれむこと、恵む、慈(いつく)しむ”という意味があり、ひいては将軍や国王、そして仏様からの深い御心といった計り知れない大きな恵みをも意味します。



我々は日常生活において様々な人間関係を結んでいます。互いに相手を気づかい、困っていたら手を差し伸べたりします。

そんな中、私たちはついつい、自分が相手にしてあげたことはいつまでも覚えており、それを自らの

功德とばかりに高慢な態度を取ってしまいがちであります。逆に誰かから受けた恩義は、それが当然であると言わんばかりに忘れてしまいがちであります。

私たちは全く気付いていないかもしれませんが、常に阿弥陀如来のご加護(“冥加;みょうが”とも言う)を、目に見えない形で受けています。阿弥陀如来の御恩や「おかげさま」なんか知ったことではない、と言いつつ人は、この世で我ほどエライ者はいないのだ、と考えている人によく見受けられる危険な特徴です。

堺市・真光寺「揭示伝道句についての法話」より

植松努氏講演会@松田町

お陰様で講演会はたくさんの皆さまにご来場いただき、大盛況でした。ありがとうございました。

主催の中野先生のところにたくさんのお礼のお手紙・FAXが届いているそうです。笑いあり、感動あり、子どもたちにもとても分かりやすい内容で、終演後、元気・やる気をたくさん受け取った皆さんは皆ワクワク瞳を輝かせながら出てこられました。懇親会で植松さんは「私の話をここに来られなかった子ども達にも聞かせたいと思っています。だから学校教育の中で喋らせてほしい!皆さんから働きかけてほしい!年間授業日数だとか予算だとか言って学校は入れてくれない。もれのないように、ここに来れない子どもに届けたいと思っています。皆さんにお願いです、学校へ働きかけてほしい。」とおっしゃっていました。まず、家庭の親御さんに、学校の先生方に「どうせ無理と言わない、子どもたちの夢を奪わない、まず大人がワクワク輝く背中を見せる」という植松さんの伝えたい大切なメッセージをしっかりと受け取ってもらえるように、これからも出来ることで働きかけていきたいと思っています。

☆最近、NETでたくさん見かける1枚クイズより! ※トンチです。答えは敢えて次回8月号で(ブログひらぼく通信にはのちほど)

()に入るアルファベットは?

C T D B S ()

ヒント…セ

(?)に入る言葉はなんでしょう?

おこし	煮付け	焚き火
団子	一つ	渡し
肉	?	菜

ある法則に基づいた計算式です。さて?

1 + 0 = 1
 1 + 7 = 0 では、
 6 + 1 = 1 80 + 99 = ?
 6 + 8 = 3
 10 + 9 = 2